

Maurice Edger Coindreau:  
*The Time of William  
 Faulkner—A French  
 View of Modern American  
 Fiction*

平野 信行

書物を読む前に巻末の索引を覗いてみるのは、ときとしてなかなかおもしろいものである。そんなことをすれば、内容がわかってつまらないではないか、と言われるかもしれないが、そこがかえって興味があるという面があることも否定できないのではなからうか。

ここにとりあげた書物は、現代アメリカ文学のフランス語訳で有名な Maurice Edger Coindreau のエッセイを集めたものであるが、この本の索引は、彼の業績をそのまま記した観がある。すなわち、ひとわり眺めてみると、本文では、表題にある Faulkner のほかに、Sherwood Anderson, John Dos Passos, Erskine Caldwell, Ernest Hemingway など、1920 年代、30 年代の中心的存在であった作家、および彼らの作品に多く言及されていることがわかり、現代アメリカ文学に対する彼の視野の広さがわかる。さらに、同じく巻末にある Maurice Edger Coindreau; A Checklist と題される 13 ページにわたる部分を見ると、索引でだいたい想像される彼の活動がより具体的になり、その広範囲なことには驚かされるのである。長篇小説の翻訳が 1969 年現在 31、このなかには、前記の 20 年代、30 年代の作家のほかに、Truman Capote, Flannery O'Connor, William Styron, Vladimir Nabokov などの contemporaries があり、彼の活動は、現代アメリカ文学のほぼ全体をカヴァーしている。それば

かりでなく、Coindreau はスペイン語もよくし、スペイン語からの翻訳が、小説・戯曲あわせて 16 篇、さらにスペイン語の文章が 27 篇という精力的な活動をみせている。

こうした彼の幅広い活動のうち、翻訳された作品そのものは読む機会が多いが、エッセイとなると、読めるのは、翻訳についている introduction や preface ぐらいで、あまり名の通っていない雑誌類に多く書いているため、その他の文章にはなかなかおめにかかれない。こんど *The Time of William Faulkner* というタイトルでまとめられたエッセイ集は、その意味でありがたい、意義のある出版である。もっとも、60 を越す論文・随筆、36 篇の書評・劇評、20 篇に近い序文類のうちから 21 篇が採られているだけであるから、満足のいくものではない。しかしこれだけの文章を全部収めるには数巻を要するだろうから、いまのところはこの程度で満足せねばなるまい。

だが、この程度といっても、これがなかなかたいしたもの、全体が四部から成っており、それぞれ *The American Novel in France*, *William Faulkner*, *Contemporaries and Successors*, *The American College Novel* と題されていて、Coindreau の業績のバースペクティブが与えられるように周到的な配慮がなされているのである。このなかでは、はじめの 2 部がおもしろいし、彼の業績を理解するうえで重要である。第 1 部では *France and the Contemporary American Novel* が注目される。ここで Coindreau は現代アメリカ文学に対するフランスの critical climate とでもいうべきものを示している。この方面のフランス人の関心はきわめて高く、アメリカ文学を研究の対象とする者にとって、なぜ彼らがそれほどまでにアメリカ文学に興味を示すのか知りたいところなので、

彼の紹介は期待される場所である。

彼によると、外国文学がフランスで享受される要件は3つあるという。その1は、作者がすぐれた心理学者的な眼の持ち主であること、言い換えれば、皮相の観察をもってよしとしないこと、つまり言葉の一般的な意味でのリアリスティックであること、である。

Sinclair Lewis, Theodore Dreiser, Sherwood Anderson などがフランスで受け入れられる理由を、彼はそのあたりに求めている。要件の2は、作品の革新性、すなわち旧来の伝統を拒け、未開拓の分野にみずから飛び込んでゆく精神である。なぜフランス人がこれを要求するかといえば、彼ら自身がたびたびこの精神を発揮してきたからで、現代アメリカ文学との関係でいえば、Lautréamont, Guillaume Apollinaire などによって準備され、第1次大戦後に開花したシュールレアリスム運動にそれが示されている。この革新性は、したがって、とうぜん何らかの実験に結びつくはずで、Anderson, Faulkner, Dos Passos など、いずれもたしかに「実験」を行なっていることを考えれば、アメリカ文学の受容に革新性の存在が条件となる、という説明は納得できる。最後に、3番目の要件は、文章の技巧であるという。2番目の要件の革新性、実験性からして、この3番目はとうぜんの帰結である。Coindreau は、小説の享受における技巧の必要ということ、Hemingway と Faulkner を例にとつてつぎのように説明している。一時 Hemingway はフランスでおおいに読まれたが、あまり長続きしなかった。それにくらべて、Faulkner はその人気はいぜんとして高い、その理由は、Hemingway がついに自分を脱け出すことができなかったのに対し、Faulkner には、自分の垣を越えて未開拓の分野に挑むという技巧の漸新さがあるからだ、という。このあ

たり、彼は、*The Sound and the Fury*, *As I Lay Dying*, *Light in August*, *Absalom, Absalom!* などの作品における高度の技巧性を念頭においているらしい。

以上の3つの要件とは別の形で、彼は、現代アメリカ文学に対するフランス人の好みの性質を説明している。それによると、フランス人は嘘のきれいな国民だから、もし作品に描かれた現代アメリカ社会が、牧歌的美しさに満ちており、キリスト教的美徳が栄えているというのであれば、彼らはけっして読まないだろう、なぜなら、そんなことは嘘にきまっているからだ、という。また、フランス人は作品を一面的に読むことはない、ともいう。たとえば、Faulkner が好きだからといって、黒人のリンチがアメリカの日常であるとか、アメリカの女性はみなミス・エミリーのような暮らしかたをしているだろう、とか考えはしない、というのである。それはそうだろう。フランス人でなくてもこんな読みかたはしない。もちろん、これは話をわかりやすくするために、きわめて単純化しているのである。ただこれに類する一般化は、ともすればがちなので、その点、Coindreau の指摘、われわれが外国文学を読む際の態度に対する警鐘となろう。

Coindreau の翻訳の仕事は、1928年のDos Passosの*Manhattan Transfer*の仏訳に始まる。彼は'France and the Contemporary American Novel'のなかで、この作品に対するフランス人の受けとめかたをつぎのように述べている。

The interest awakened by *Manhattan Transfer* was very great. The book possessed the three qualities required to attract the respect of the enlightened

French public. For the first time the French saw New York as they imagined it was, with all the miseries and turpitudes of large cities. They felt like swarming in it, and they were interested in the heroes because they saw in the characters the same restlessness which obsessed them at the time. They saw Jimmy Herf as similar to the people which the postwar period had produced in Europe—those *déracinés* of whom Philippe Soupault traced such a moving portrait in his novel *A la Dérive*. There was communion of souls; consequently, comprehension and sympathy. Finally, the technique of the novel was extremely skillful, very *couleur du temps* in its cinematographic flickering. (p. 8)

この文章で New York をアメリカ南部に、Jimmy Herf をたとえば Quentin Compson というように変えてみると、ほとんどそのまま Faulkner の作品に当てはまるから、Dos Passos に始まり、Hemingway を経て、やがて Faulkner に到る Coindrean の翻訳の方向はとうぜんであろう。

本書には Faulkner 関係の文章が 11 篇探っているが、そのうち 3 つは *Light in August*, *The Sound and the Fury*, *The Wild Palms* の preface で、すでによく知られているもの。のこり 8 篇のうち興味があるのは、William Faulkner in France, On Translating Faulkner, Faulkner Misjudged in United States であるが、なかでも最後の 2 つが面白い。まず 'On Translating Faulkner' では、翻訳の際の心構えとしてつきのように述べている。

What is most important to obtain is

a translation which will give to the foreign reader the same impression that the original text gives to the reader in whose language it was written. An error in the interpretation of a question in detail, a mistake in a technical word, and even the vocabulary substitution of one word for another (a procedure which is often necessary when it is a matter of names of birds, fish or flowers) are only venial sins. On the other hand, to modify the general style of an author or, what is even worse, to substitute for it one's own style is the cardinal sin of inexperienced translators. A translator who would not make it possible for his readers to recognize immediately the style of Hemingway, let us say, or that of Thomas Wolfe, would be an execrable translator even if one could find no error in his text. (p. 85)

こういう文章に出会わずと、Coindreau の言うところの cardinal sin はもとより、venial sins もしょっちゅう犯している、紛れもない inexperienced なこの書評子は、冷汗たらたらであるが、練達の翻訳で鳴る Coindreau にしても、相手が Faulkner ともなると、その翻訳は一筋縄ではいかないらしく、このエッセイのなかでしきりにこぼしている。なかで、興味をひかれるのは、英語とフランス語の特異性を指摘しているところで、われわれが翻訳する場合の日本語と英語の問題にひきくらべてたいへん参考になる。

彼は、Faulkner の作品を翻訳する場合にもっとも苦勞するのは、彼の英語の obscurity を損わずに訳出することだ、という。

そして Faulkner の英語の obscurity の一つの要素は、英語のもつ ambiguity にあるのだ、と述べている。言語としてみた場合、英語とフランス語でいずれが obscure であるか、という微妙な問題に関しては、筆者は自信のある答えを用意できないが、いわゆる shades of meaning の幅はどうも英語のほうがありそうなので、なんとなく英語のほうが obscure のような印象をうけることはたしかだ。Faulkner の場合は、その英語が obscure な上に、彼の語感がきわめて鋭いので、その語感を翻訳に出す上の困難がある。場合によっては、翻訳の文では原文の語配列を変える必要も起こってくる。それなのに、the translator should not chop the author's longer sentences into small segments, nor inversely string together his shorter sentences to make long ones (p. 86) と言わなくては、もはやお手上げである。

'Faulkner Misjudged in United States' は、正確には 'One Year After His Death Faulkner is Still Misjudged in the United States' という長いタイトルで、1963年7月10日号と23日号の *Arts* に載ったものである。この文章は、Faulkner を愛してやまない Coindreau の彼に対する homage であると同時に、彼をいまだに理解できないアメリカ人に対する慨嘆、なかでも若手の作家の Faulkner 理解に対するもどかしさの表現でもある。Coindreau に言わせると、

Through the windows of the past he (i. e. Faulkner) saw still virgin forests where bears and deer and panthers ran. He saw Mohataha, the old Indian queen, make her mark at the bottom of a document which took away her royal power, and then, wrapped in her purple

robe, still proud beneath her parasol in the wagon escorted by her young warriors, leave for the West, without once looking back, toward the concentration camps hypocritically camouflaged by the name of "reservations".…………… To shelter these treasures which he knew to be fragile, he built himself a town, Jefferson, in Yoknapatawpha. He enclosed himself in it and spent his life there. No one could get into it, but from time to time he opened the doors and let a few of the inhabitants go out bearing messages from their creator about the agony "of the human heart in conflict with itself". (pp. 105—106)

というわけであるから、この Faulkner を理解するためには、彼がたいせつにした過去にとびこむことがどうしても必要である。しかるにいまのアメリカはどうか。古いものは用なしで、せいぜい町の記念館や公園に保存しておくことぐらいしかしない。いまのアメリカ人が Faulkner を理解できない原因の1つはこれなのだ、Coindreau はそう考えている。しかし彼がこの文を書いたのは1963年、それから8年近く経っている。彼の頭にあった若手作家もいまは中堅どころで、彼らにかわって新しい傾向の作家が成長しつつある現在、彼は、この新人に向かって Faulkner をどう読めと言うだろうか。

Maurice Edgar Coindreau: *The Time of William Faulkner—A French View of Modern American Fiction*. Edited and Chiefly Translated by George McMillan Reeves (the University of South Carolina Press 1971).